

人物表

加納 響子 (34)

加納 正治 (17)

山城 恵一 (32)

香田 哲也 (54)

飛田 明 (38)

その他

○ 加納家・居間（朝）

サイドボードの上には、写真立てがある。写真に、加納響子と加納正治が写っている。正治の、小学校入学式に撮った写真。何かを焼く音と、響子の鼻歌が聞こえてくる。

○ 同・キッチン

加納響子（34）が料理をしている。卵焼きを、弁当箱に詰める。テーブルの上のトースターから、こんがり焼けたパンが出てくる。響子は、フライパンを持ったまま歩き、キッチンを出て行く。

○ 同・居間

響子が居間を通り抜け、ドアを開ける。

○ 同・廊下

響子が今のドアから顔を出して、階段の上へ向って言う。

響子「正治、そろそろ起きなさい。ご飯で
きるわよ」

○ 同・正治の部屋

整理整頓された部屋。

学生服に着替えている加納正治（17）。

正治「（響子に聞こえるように）もう起きて
るよ」

○ 同・キッチン

テーブルに座って、朝食を食べている響

子と正治。

正治「……お母さん、大丈夫なの？」

響子「なにが？」

正治「時間。いつも、慌てて出てく時間でし
よ」

響子「（時計を見て）え？ ああ、いいのよ。

今日は十時から出勤なんだ」

正治「ふーん」

正治がチラリと、キッチンの方を見る。

キッチンには、弁当箱は一つしかない。

正治「(不審がって) ……」

響子「どうかした？」

正治「ううん。なんでもない。…あ、今日、

図書館に寄るから、遅くなる」

響子「うん。わかった。今日の晩御飯は何、
食べたい？」

正治「何でもいい。残り物でいいよ」

響子「もう！ また、そんなおっさん臭いこ
と行って。…そうだ。今日、パーっと、
どこか食べに行こうか？」

正治「(呆れて) ……母さんこそ、何言っ
てるの。もうすぐ、僕、修学旅行なんだから
さ、今月は切り詰めなきやって言ったの
は、母さんでしょ」

響子「…あ、そうか」

正治「…あのさ、なんなら、行かなくても
いいよ。旅行」

響子「何言ってるの！ ダメよ。大丈夫。そ
のくらい、ちゃんととってあるんだから、

心配しないで」

正治「……わかった。(立ち上がる)」

そして、居間の方へと向う正治。

○ 同・居間

正治が歩いてきて、ソファーの上の鞆を
掴む。

正治「じゃあ、行ってきます」

響子の声「正治、忘れ物」

正治が振り向くと、お弁当を持った響子
が現れる。

響子「ほら、お弁当(正治に渡す)」

正治「……(受け取って)行ってきます」

響子「いってらっしゃい」

正治が居間から出て行く。

響子「……修学旅行かあ(ため息)」

ハッとして、時計を見る響子。

響子「私も、そろそろ行かないと」

居間を出て行く響子。

○ 同・響子の部屋

スーツ姿の響子が、机から一枚の紙を取り出す。

響子「……今日こそは（気合を入れるように）」

響子が握っているのは、履歴書。

○ 面接室

響子の履歴書を見ている中年男性の面接官。

面接官「加納……響子さん、ね。前の会社は解雇って書いてあるけど、何か問題を起こしたんですか？」

響子「いえ、私が勤めていた部署の業績が悪くて、その部署自体がなくなってしまったんです」

面接官「……今は不景気ですからね。お子さんを一人で育ててるのに、大変でしょう？」

響子「そうなんです。ですから、早く新しい

職を見つけないと……」

面接官「……でも、どうして離婚を？ 何か

あったんですか？」

響子「(ムツとして) それが、面接に関係あるんですか？」

面接官「(ムツとするが、すぐに笑顔で) そうでしたね。すいません。じゃあ、これで面接を終わります」

響子「え？」

面接官「結果は、合格の場合こちらから連絡を……」

響子「待ってください。私、そんなに質問されてないと思うんですけど」

面接官「(履歴書を見て) 加納さん。履歴書の資格の欄に何も書いてませんが、書き忘れますか？」

響子「あ、……いえ」

面接官「いくら、パートとはいえ、最低簿記くらいの資格を持ってないと厳しいですよ。しかも、高卒ですか……」

響子「……（面接官を睨みつける）」

○ 街路

イライラしたように歩く響子。

響子「あー、むかつく。くそつ、あのタヌキ
ジジイめ」

タヌキの絵が描かれた看板がある。

響子「（看板の前に立ち）高卒で、何が悪い
のよ！」

看板を蹴る響子。

響子「痛っ！（看板に向って）あー、もう、
何するのよ」

その時、響子の携帯の着信音が鳴る。

取り出し、画面を見る。

『川原恵美』と表示されている。

響子「（通話ボタンを押して）……もしもし、
恵美？ どうしたの？」

川原恵美（34）の声「あ、響子。どうだった？
面接」

響子「うるさいわね。ふん。あんな会社こつ

ちから、願い下げよ」

恵美の声「何言ってるのよ。仕事、選んでる場合じゃないでしょ。早く決めないと。今回で、落とされたの、十社目なんだし」

響子「わかってる。で、要件はなに？」

恵美の声「あ、そうそう。パートになるんだけど、結構時給がいいところ見つけたから、知らせようと思って」

響子「え？ どこ、どこ？」

恵美の声「神田原遊園地。舞台裏のスタッフ募集だって」

響子「……舞台裏？」

恵美の声「うん。あそこ、ショーをやってるじゃない。子供向けのヒーローショー。着ぐるみきてさ」

響子「あー、そんなのもしてたわね」

恵美の声「結構、仕事がきついみたいで、すぐ人が辞めるんだってさ。そこなら、きつとすぐ合格だと思うよ」

響子「……ヒーローショーかあ」

恵美の声「あ！ ごめん。やっぱり、思い出
しちゃうよね」

響子「ううん。まあ、そんなことも言ったら
れないし。サンキュー、恵美。さっそく行
ってみるよ」

電話を切る響子。

響子「……ヒーローかあ」

○ 神田原遊園地・外観（夕方）

『神田原遊園地』の看板。

○ 神田原遊園地・事務所

事務所の壁には、たくさんの写真が飾ら
れている。

その写真は全部、特撮怪物の写真。

机に座って、履歴書を見ている山城恵一
(32)。

向かいのソファーに、緊張気味に座って
いる響子。

山城「じゃあ、明日から来てください」

響子「え？」

山城「動きやすい格好でお願いします。あと、軍手とかは、こちらで用意しますので」

響子「あの、合格でいいんですか？ 私、その、高卒ですし、資格もないですし」

山城「いやいや、そんなのは、関係ないですよ。必要なのは情熱です。見てください」

山城が立ち上がり、壁にかかっている写真を指差す。

山城「知ってますか？ ゴメラ」

響子「……（写真を見る）」

写真は白黒で、怪獣の着ぐるみを着ている男性が微笑んでいる。

山城「（熱弁）このゴメラの製作者たちは、なんと全員が高卒の人ばかりだったんですよ。それなのに、あれほどの偉大な作品を作り上げた。それは、学歴などではなく、情熱こそが必要と証明したということですよ！」

響子「は、はあ……」

山城「いやあ、最初にゴメラを見たときは衝撃でしたよ。私も、ぜひ、自分で生み出してみたいかなりましてね。それで、この遊園地でも、ショーを始めたってわけなんです」

響子「(熱弁についていけず) そ、そうなんですか……」

○ 加納家・キッチン

響子と正治が、夕食を食べている。

響子「(食べながら) ああ、そうそう、お母さん、仕事変えたから」

正治「え? ……なんで? 職場、結構気に入ってるって言ったのに」

響子「もっと給料がいいところ、見つかったんだよね」

正治「それって、正社員なの? 前は、給料が安くても、ちゃんと社員にだから、いいんだって言ってたよね?」

響子「パ、パートだけど……。いいの。あん

たは、何も心配しないで」

正治「……いいけどさ、変える前に言ってよ。

……で、どんな仕事なの？」

響子「神田原遊園地で、裏方の仕事」

正治「ふーん。確か、あそこって着ぐるみの

ショーやっているとこだよね」

響子「シヨ、シヨーとは、関係ない部署だから、平気よ」

正治「……別に、僕に気を使わなくていいよ。

逆に母さんの方は平気なの？」

響子「うん……。全然、平気（作り笑い）」

○ 神田原遊園地・舞台

戦隊物のショーが行なわれている。

子供たちが真剣に見ている。

○ 同・舞台裏

慌しく動いているスタッフたち。

その中に、ジャージ姿の響子もいる。

そんな時、大きな声が響いた。

山城の声「香田さん！ 本番前には止めてくれ
れって言ってるでしょ！」

山城が、着ぐるみを着ている（頭だけは
外した状態）香田哲也（54）に向って怒
鳴っている。

香田は、椅子に座って焼酎を煽っている。

香田「バカ野郎！ こっちは、これで三十年
やってるんだ。逆に飲まないと調子がでな
いんだ」

山城「……そうは言ってもですね」

香田「黙って見てろい。若造が」

香田が、着ぐるみの頭を被り、完璧な怪
人の姿になる。

長い尻尾と、背びれ。トカゲが立ったよ
うな、恐竜のような怪人姿。

香田「じゃあ、行ってくるぜ」

立ち上がり、歩き出す香田。

山城「だ、大丈夫かな……」

響子「……」

○ 同・舞台

五人のヒーロー達が雑魚敵をやっつけたところに、怪人姿の香田が現れる。

香田「おのれえ、今度は私が相手だ」

香田がふらつきながら、ヒーロー達に向かっていく。

が、足を捻って倒れてしまう。

香田「ぐ、ぐわっ！」

ヒーロー・観客たち「……」

香田「(ハツとして) お、おまえたち、かれ！」

倒れていた、雑魚敵役の人たちが慌てて立ち上がり、ヒーロー達に襲い掛かる。

ヒーロー1「むう、しぶとい奴らめ」

ヒーローと雑魚敵との戦いが再開される。

その中で、香田が這うようにして舞台裏へと移動する。

○ 同・舞台裏

四つん這いで舞台裏に入ってくる香田。

山城「香田さん！」

山城と、スタッフ、そして響子が香田にかけよる。

香田「た、助けてくれ！」

苦しそうに、右足を抑える。

山城「ど、どうしたんですか？」

香田「お、折れた。死ぬ！」

山城「骨折ですか？ みんな、とにかく着ぐるみを脱がして」

スタッフ1「は、はい」

スタッフたちが、香田の着ぐるみを脱がす。

香田の右足首が、腫れている。

香田「は、早く、医者だ。病院に」

山城「し、しかし、舞台は……」

香田「それどころじゃないだろ！ 早くしないと死んでしまう」

響子「（大きくため息をついて）ただの捻挫じゃない」

香田「……は？」

香田の前に行き、屈んで香田の足の状態を見る響子。

響子「(スタッフに) 湿布と包帯ありますか？」

スタッフ2「は、はい」

スタッフが、救急箱から包帯と湿布を出し、響子に渡す。

受け取った響子が、香田の足に湿布を張り、手馴れた手つきで包帯を巻いていく。

香田「(啞然として) ……」

山城「(啞然として) ……」

響子「骨折の心配はなさそうですが、念のため病院には行ってください」

山城「ず、随分と手馴れてますね」

響子「学生の頃、体操をやってまして……。

それで、この手の怪我には慣れてるんです

よね(包帯を巻いていく)」

山城「あの、ショーには(出れそう?)」

響子「それは、さすがに無理ですね。少なく

でも一週間は安静にしないと」

山城「そ、そんな……」

香田「……」

響子の体型をジッと見る香田。

香田「うむ。あんたならいけそうだ」

響子「は？」

香田「ワシの代わりに、着ぐるみに入って、

ショーに出るんだ」

響子「そ、そんな無理ですよ」

香田「ここには、ワシと同じ体格は、あんた

しかおらん」

響子「そんなこと言われても……」

山城「私からもお願いです。もう、ショーは

始まっていますし……」

響子「……（困って）」

香田「手順は、そんなに難しいことじゃない。

ヒーロー側が合わせてくれる。あんたは、

適当に動き回って、最後に倒れてくれれば

いい」

響子「……でも、着ぐるみは」

舞台のほうが、ザワザワと戸惑いの声が
あがり始めている。

山城「お願いします。そうだ！ うまくいっ
たら、パートから正社員に昇格させてもい
いですよ」

響子「え？　せ、正社員？　でも……」

山城「ボ、ボーナスもつけますよ」

響子「……」

× × ×

フラッシュバック

正治「……あのさ、なんなら、行かなくても

いいよ。旅行」

× × ×

響子「（決意した目で）分かりました。やり
ます！」

○ 同・舞台

ヒーローと雑魚敵が、戦っている。

雑魚敵は、やられてもすぐに立ち上がり、
また戦い始める。

観客が、ゾロゾロと舞台の前から離れ始めている。

その時、「おのれえー」と、怪人の雄叫びの音が放送で流れる。

振り向く、観客達。

すると、舞台の裏から怪人が現れる。

ヒーローと雑魚敵役の人たちが、ホッと、雑魚敵役が、舞台裏に下がっていく。

香田の声「今度は、私が相手だ」

香田の声に合わせて、ヒーローに向かっていく怪人。

ヒーロー1「現れたな怪人め。俺たちがやつつけてやる。トゥー」

ヒーロー1が、怪人に向かって飛び蹴りを放つ。

怪人「きゃっ！」

咄嗟に、ブリッジで蹴りを避ける怪人。

ヒーロー1「なっ！」

ヒーロー2「こ、今度は、俺が相手だ」

ヒーロー2のパンチ。

怪人「ちよ、危ないっ」

怪人は側転で、ヒラリとかわす。

ヒーロー3「く、くそっ」

次々、ヒーロー達が怪人に襲い掛かる。

ヒーロー達のパンチや蹴り。

怪人「うわ、……ひえ、ひゃっ」

その攻撃をアクロバットに、器用にかわす怪人。

○ 同・舞台裏

マイクを握った香田と山城が、舞台の様子を見ている。

香田「こりや、何を避けてるんだ！ 早くやられないか」

山城「（響子の動きに見惚れて）……すごい」

○ 同・舞台

息を切らせて、肩を揺らせるヒーロー達と怪人。

ヒーロー1「（小声で）お、おい……。段取

りと違うだろ」

響子「へ？ ……あ、そっか。やられないと」

ヒーロー1「(小声で)いいか、今度はよけるなよ」

響子「……(うなづく)」

ヒーロー1「(大声で)怪人め、これで最後だ。トゥー！」

再び、飛び蹴りを放つ、ヒーロー1。

響子「きゃあ」

今度は蹴りを受け、倒れる怪人。

ヒーロー1「どうだ！ 怪人。参ったか」

香田の声「くそ、覚えていろよ」

響子「……(倒れたまま)」

香田の声「大きい声でくそ、覚えてろよ！」

響子「……！(ハツとして)」

慌てて、立ち上がり舞台裏に逃げていく
怪人。

ヒーロー1「これで、世界の平和は保たれたぞ！」

シンと静まりかえっている観客達。

ヒーロー達「……」

○ 同・舞台裏

ガツクリと肩を落として、落ち込んで
いる怪人。

響子「……（ダメだったかと）」

その時、ワッと歓声があがる。

響子「え？」

○ 同・舞台

観客達が一斉に拍手をする。

子供1「怪人、かっこいい！」

中年の男1「すごかったぞ、怪人！」

子供2「お母さん、怪人さん、すごかったね」

母親「そうね、すごかったわね」

中年の男2「もう一回、やれ！ 怪人」

観客を前に、ガツクリと肩を落とすヒー

ロー達。

ヒーロー1「いや、俺たちが主役なんですけど……」

○ 同・休憩室

着ぐるみの頭の部分を外した響子が、ぐったりと椅子に座っている。

響子「つ、疲れた……」

山城の声「お疲れ様でした」

響子「え？（顔を上げる）」

山城が響子の前に立っている。

山城「（ニコリと笑って）本当に、ありがとうございます
うございました」

響子「（ドキッとして）い、いえ」

山城「大盛況でした。これで約束通り」

響子「はい？」

山城「正社員として、契約しましょう」

響子「！」

ガバッと立ち上がって、深々と頭を下げる響子。

響子「ありがとうございます！」

○ 加納家・キッチン

鼻歌を歌いながら、料理をする響子。
テーブルには、豪華な料理が並べられて
いる。

その光景を呆然と、椅子に座ってみてい
る正治。

正治「お母さん、どうしたの？ これ」

料理を盛りつけた皿を持って、振り向く
響子。

響子「ふふーん。実はね、今日、正社員にな
れたのよ」

正治「え？ ホント？ おめでとう！」

響子「し、か、も、ちよつとしたボーナスま
で出たのよ。これで、修学旅行も安心して
行けるわよ」

正治「……ありがとう。でも、ごめん」

響子「（椅子に座って）え？ 何が？」

正治「僕のせいで、母さんには、苦勞かけて
ばっかりだね」

響子「何言ってるのよ。息子の面倒をみるの
は、母親の義務よ、義務。あんたは、そん

なこと気にしないの」

正治「……（うつむいて）」

響子「ま、その分、私の老後を頼むわよ。医者にもなって、私に贅沢させて」

正治「うん。そうする」

響子「冗談よ。あんたは、好きなことしなさい」

正治「……」

響子「ほら、そんな顔しないの。今日は私の
お祝いなんだからさ」

正治「う、うん。いただきます」

響子「いただきます」

料理に箸を伸ばす、響子と正治。

○ 神田原遊園地・舞台裏・休憩室

響子と山城が話している。

その横では、松葉杖をついた香田の姿がある。

響子「き、昨日だけじゃないんですか？」

山城「ええ。もちろん」

響子「で、でも……」

山城「(香田の足を見て) 香田さんだって、この足ですし、加納さんは怪人役として、正社員になつてもらつたんですよ」

響子「そ、そんな……」

香田「大丈夫。あんたなら、やれるさ。あれは、素人の動きじゃなかった」

その時、山城が響子の手をギュッと握る。

山城「目をキラキラさせて」そうです！ 加納さんの、昨日の動きは素晴らしかった。まるで、あのゴメラを見てるようでした」

響子「(ドキドキ) そう言われても、着ぐる

みはちよつと……」

香田「よし！ そうと決まったら、さっそく特訓だ！」

香田が響子の腕を掴み、松葉杖を使って器用に歩き出す。

響子「勝手に決めないでください！」

○ 学校・校庭(夕方)

楽しそうに、サッカーをしている男子生徒たち。

○ 同・教室

教室には正治しかいない。

正治「……」

窓から、サッカーをする生徒たちをジッと見ている正治。

机に、教科書とノートが乗っている。

その時、ガラガラとドアが開き、原田恭

介(17)と、男子生徒二人が入ってくる。

原田「(正治を見て) おっ！ 優等生が残って勉強してるぞ」

男子生徒1「感心、感心。やっぱり、優等生は違うよね」

原田たちは、正治とは離れた場所で話し出す。

原田「(正治に聞こえるように) てか、わざわざ学校でやらなくても、いいじゃんよ。俺らへのあてつけか？」

男子生徒2「違うよ。ちゃんと学校でやらな
いと、アピールにならないからさ」

原田「アピール？」

男子生徒1「先生に見てもらわないと」

原田「『ぼくちゃん、真面目に勉強してま
す』てか」

正治「(勉強を再開して)……」

原田「内申点上げるの、必死だな」

男子生徒1「そりやそうだよ。奨学金もらわ
ないといけないんだから」

原田「片親だと大変だよなあ」

正治の手が、ピタリと止まる。

正治「……」

○ 加納家・リビング

響子がソファにうつ伏せで寝転がっ
ている。

手には、湿布を持っている。

響子「痛てて。あー、もう年は取りたくない
わ。あれだけで、筋肉痛になるなんて」

ガチャリと扉が開き、正治が入ってくる。

正治「ただいま」

響子「お帰り。あ、丁度いいところに来た。ちよつと、湿布貼ってよ」

正治「いいよ」

正治が響子の腰に湿布を貼る。

響子「あー、気持ちいい」

正治「……仕事、キツイの？」

響子「まあ、それなりにね。今回は身体動かす仕事だからさ」

正治「……なんで、仕事変えたの？」

響子「うん？ 前にも言ったでしょ。給料が
いいから」

正治「……僕のため？」

響子「もうちよつと、贅沢したかっただけよ」

正治「僕も、何かバイトでもしようか？」

響子「！」

ガバツと起き上がる響子。

響子「何言ってるの！ あんたは、そんなこ

と、心配しなくてもいいの」

正治「……」

響子「とにかく、あんたは、あんたのしたいことをしなさい。いいわね」

正治「（小声で）……母さんは、いつもそうだ」

響子「え？」

正治「ううん。なんでもない」

○ 神田原遊園地・舞台裏・休憩室

怪人姿の響子が、休憩室の中をウロウロしている。

山城「加納さん、少し落ち着いてください」

香田「人が多くても、やることは一緒だ」

響子「……（ソワソワ）」

山城「それにしても、集まりましたね」

香田「日曜日だからな」

山城「香田さんが、入ってた時だって、こんなに集まったことないですよね」

香田「（ムツとして）三連休だからな！」

響子「……（ソワソワ）」

○ 同・舞台

舞台の前に、人だかりが出来ている。

子供はもちろん、その親や、学生の姿も見える。

舞台では、五人のヒーローが雑魚敵と戦っている。

そこに、観客の野次が飛ぶ。

中年男性「いいから、怪人出せえー！」

子供たち「怪人さーん！」

ドツと笑いが起こる。

○ 同・敷地内

原田が、男子生徒二人と共に、アイスを食べながら歩いている。

原田「お前、ガキかよ。今更、ヒーローショー見たいなんてよ」

男子生徒1「いや、それが結構すごいみたいなんだって。噂、すごいんだって」

男子生徒2「プロ、顔負けってやつ」

原田「プロつつても、ショーは、ショーだろ。
くだらん」

その時、ワッと歓声上がる。

原田「ん？（騒がしいほうを見る）」

人だかりの向こうに、舞台が見える。

男子生徒1「あ、あれあれ」

男子生徒2「行ってみよ」

原田「気が進まんな」

歩き出す三人。

○ 同・舞台

ヒーロー五人が、怪人に攻撃する。

怪人はバク転、バク宙、側転で軽やかに
避けていく。

そのたびに、観客が拍手をする。

ヒーロー1が、飛び蹴りをする。

怪人はかわそうするが、突き出た顎に当
たり、頭の部分が取れる。

響子「ああっ！」

慌てて、拾いにいく怪人。

ドツと笑いが起こる。

○ 同・観客側

人だかりの後ろから見ている原田たち。

原田「（響子の顔を見て）ん？ あれって：

：

○ 同・舞台裏（夕方）

山城と向かい合うように、響子や、ヒーローたち、香田、スタッフ達が立っている。

山城「今日も、お疲れ様でした」

一同「お疲れ様でした」

山城「大盛況でしたよ。（響子を見て）ただ、

少しアクシデントがありました」

響子が恥ずかしそうにうつむき、一同が

ドツと笑う。

山城「それですね、大ニュースがあります」

一同が静まりかえる。

山城「何とですね、評判を聞きつけて、あるところが、うちとコラボしたいって言ってきました」

一同、山城の言葉に聞き入る。

山城「それは、何と『ガオレイン』です！」

スタッフ1「ええ！　すごい！」

スタッフ2「ガオレインって、今、すごい流
行ってる戦隊のよね」

山城「しかもです。なんと、ガオレインの
タントをやってる本人が来てくれるん
です」

響子「（目を見開いて）！」

スタッフ3「うわーっ。本物だって、サイン
もらおうっ」と

響子の横にいる香田が、ポンと響子の肩
に手を置く。

香田「大丈夫だ。あんたの動きなら、プロに
だって引けをとらんさ」

響子「（引きつった顔で）は、はい……」

× × ×

部屋には、響子しか残っていない。
椅子に座っている響子。

響子「はあ……。どうしよう……。…」

ガチャリと、休憩室のドアが開く。

山城が入ってくる。

山城「良かった。まだ残っていてくれてたんですね」

響子「山城マネージャ……。どうしたんですか？」

山城「実は……。加納さんに話があるんですよ」

響子「私に、ですか？」

山城「(真剣な顔で) ちょっと来てくれませんか」

響子「(ドキドキ) は、はい！」

○ 同・事務室

山城と響子が入ってくる。

山城が振り向き、響子の両肩を掴んで迫る。

山城「実は、私！ 加納さんを一目見たとき
からっ！」

響子「え……、ええっ！」

山城「惚れしてしまっただんです」

響子「(ドキドキ) きゅ、急に言われても……
……」

山城「(ハッとして) すいません。つい興奮
してしまつて…… (手を離す)」

響子「(ドキドキ) い、いえ」

山城「それで、加納さんに見てもらいたいも
のがあるんです」

響子「……なんですか？」

山城「……」

山城が歩き出し、部屋の隅に置いてある、
なにやら布に覆われているものの前で
止まる。

山城「これです！」

山城が布を掴み、バツと布をとる。

布の下には、響子が着ている怪人の着ぐ
るみがあった。

響子「……え？」

山城「見てください。ここ」

山城は、着ぐるみの右手の部分を開いて
見せる。

親指のところに、ボタンのようなものが
ついている。

山城「ここを押すと……」

山城がボタンを押すと、着ぐるみの口の
部分から火が、ゴーつと出る。

響子「きゃっ！」

山城「(得意気に) どうですか？　すごいで
しょ」

響子「(戸惑って) ……あのこれは？」

山城「私、加納さんのあの、初舞台の動きを
見て、『これだ！』って思ったんです。あ

なたは、着ぐるみの天才だ。あの動きに、
私は惚れたんです」

響子「え？　動き？」

山城「これで、本場のヒーローを驚かせてや
りましょう！」

響子「……そ、そうですね。(大きくため息)
まあ、そうよね……(ガッカリ)」

○ 学校・校門前(夜)

正治が学校の校門から出てくる。

男の声「よう、正治！ 随分、遅くまで残っ
てるんだな」

正治「え？(顔を上げる)」

街灯の下に立っているのは、スーツ姿の

飛田明(38)だった。

正治「(驚いて)……父さん」

○ ファミリーレストラン

明と正治が向かい合わせに座っている。

明「三年ぶり、くらいか」

正治「……急にどうしたの？」

明「いやあ。仕事でこっちの方に来ていてな。

それで、久しぶりに会いたくなっただ」

正治「ふーん」

明「なあ、正治。一緒に暮らさないか？」

正治「！」

明「妻も、了承済みだ。どうだ？ 父さんと

暮らさないか？」

正治「……」

明「仕事も順調だし、お前には辛い思いはさせない。今よりはいい暮らしを約束するぞ」

正治「別に……。今の暮らしに不満があるわけじゃないし」

明「お前が父さんと暮らせば、響子だって楽になるはずだろ」

正治「!？」

× × ×

ヘトヘトで、ソファーに寝ている響子の姿。

× × ×

正治「……」

明「な？ そうしろよ」

正治「少し、考えさせて」

○ 加納家・キッチン

テーブルの上には料理がある。

響子は椅子に座って、頭をかかえている。

響子「(深いため息) いやだなあ……」

そこに、ドアが開き、正治が入ってくる。

正治「ただいま。……今日、ご飯いらさないから。食べてきた」

そのまま、居間を出て行く正治。

響子「え？ ちょっと、正治。どうしたの？
誰と食べてきたの？」

○ 同・正治の部屋

正治が入って来て、鞆をベッドの上に放り投げる。

机に向かい、頭を抱える。

正治「……」

× × ×

明「お前が父さんと暮らせば、響子だって楽になるはずだろ」

× × ×

正治「(重いため息)」

○ 学校・教室 (日替わり・夕方)

教室で勉強している正治。

そこに、原田たちが入ってくる。

原田「おっと、まだいたのかよ。先生たち

だって、ほとんど帰ったぞ」

正治「……(無視して勉強を続ける)」

男子生徒1「先生が全員帰るまでは、あきら

めないんじゃない？」

原田「まあ、必死なのはわかるけどよ。親が

あんな、恥ずかしい仕事してるんだ。そり

ゃ、頑張らないとな」

正治「！」

男子生徒2「あれは、ビックリしたよね。ま

さか、怪人役してるなんて」

正治「(立ち上がった) どういうことだよ！」

原田「あん？ おまえ、親の仕事も知らない

のか？ のん気なもんだな。お前のおばさ

ん、ヒーローショーで着ぐるみ着て、踊り

まくってたぜ」

正治「嘘だ！」

原田「は？ 何が嘘だよ。俺は、確かに見たんだ」

正治「(つぶやくように)そんな、母さんが、

また着ぐるみ着るなんて……」

原田「何だ、聞いてなかったのか？ 隠したい気持ちも解るけどな」

正治「嘘だ……」

男子生徒「仕方ないんじゃない？ あれって、結構給料いいんですよ」

正治「！」

原田「まあ、お前がいなければ、おばさんだって、あんな仕事しないんじゃないか」

正治「……ぼくの、せい」

原田「あー、お前みたいなの、ウジウジした優等生が嫌いなんだよ。早く帰れ」

正治「……」

○ 加納家・リビング

響子が、一枚の写真を見ている。

二十代の頃の響子が、怪獣の着ぐるみを
着て、笑っている写真。

響子「……いつまで、引きづってるんだろ……」

そこに、正治が、勢い良くドアを開けて、
入ってくる。

正治「どういうことだよ、母さん！」

響子「(啞然と) え？」

正治「ショーとは、関係ない仕事だって言っ
たのに」

響子「正治……、どうして、それを」

正治「もう過去には囚われない、もうショー
の仕事はしないって言ってただろ」

響子「正治、これはね……」

正治「母さんは、いつもそうだよ。何でも自
分だけで決めて。僕には何にも教えてくれ
ない」

響子「それは、あんたに心配をかけたくな
く……」

正治「仕事変えたのだから、何にも相談してくれないでさ」

響子「違うの。あれは、前の職場がクビになつたから。あっ（しまった!）」

正治「どうして、そんな大事なことを、黙ってるの？ それなら、僕だってバイトとか、家事だって手伝うのに」

響子「母さんは、正治にそんなこととして欲しくないからよ」

正治「何言ってるのさ。家族でしょ。困った時は、助け合ひのが当然だよ」

響子「あんたは、何も心配しないで、やりたいいことをしてればいいの!」

正治「もう、うんざりだよ！ そんなの、自分が出来なかつたことを、僕に押し付けてるだけだろ。ただ、母さんは、父さんに意地を張ってるだけなんだ」

響子「え?」

正治「僕を引き取るって言ったから、ちゃんと自分ひとりで育てれるんだって、お父さ

んに見せ付けたいだけだろ！」

響子「！」

響子が正治の頬を叩く。

響子「あんた、本当にそんなこと、思ってるの？」

正治「僕、父さんと暮らすことにするよ」

響子「え？」

正治「父さん、一緒に暮らさないかって言うてくれたんだ」

響子「ちよっと待ってよ。それって」

正治「僕がいなくなれば、母さんは、自分のしたいことができるようになるだろ」

正治がリビングから出て行く。

響子「……（呆然と）」

正治が家から出て行く音が聞こえる。

家の中が、静寂に包まれる。

○ 街路（夜）

正治が歩きながら、携帯電話で話している。

正治「あ、父さん。……うん。そっちで
らすよ。……うん。じゃあ」

電話を切る正治。

正治「(空を見上げ)……」

○ ファミリーレストラン(日替わり)

響子が席に座っている。

響子「……(落ち込んで)」

恵美の声「響子、お待たせ」

響子「(顔を上げて)……恵美」

恵美「(席に座って)ごめんね、遅れちゃっ
て」

店員が、恵美の前に水を置く。

響子「ううん。こっちこそ、ごめん。急に呼

び出しちゃったりして……」

恵美「気にしないでよ。水臭いなあ。(店員
に)あ、私、アイスコーヒーね」

店員が「かしこまりました」と下がって
いく。

恵美「……で? どうしたの?」

響子「うん……。実はね……」

× × ×

響子「……」

恵美「なるほどね……」

テーブルの上のグラスには、ほとんどア
イスコーヒーが残っていない。

響子「私、正治が何を考えてるのか、全然分
からない」

恵美「うん。それは当たり前だよ」

響子「え？」

恵美「響子、あんたねえ。親だからって、子
供の気持ちたちが全部分かるのが当然だと思
ってるの？」

響子「……でも」

恵美「親子だって、ちゃんと話し合わないと、
相手の気持ちなんてわからないよ。……ち
ゃんと、仕事のこととか相談するべきだっ
たんだよ」

響子「でも、あの子には、変な心配かけたく
ないし……」

恵美「それを、正治くんは望んだの？」

響子「……！」

恵美「相談されないうってことは、頼りにされてないってことよ。正治くんは、お母さんを助けたいって思ってたんじゃないの？」

響子「!？」

× × ×

フラッシュバック

正治「何言ってるのさ。家族でしょ。困った

時は、助け合うのが当然だよ」

× × ×

響子「……あ」

恵美「響子。あなたは、どうしたいの？」

響子「……正治と、一緒に暮らしたい」

恵美「(微笑んで)うん。じゃあ、その気持

ち、ちゃんと伝えないと」

響子「(決意した目)ありがとう、恵美」

○ 学校・校門

校門から、正治が出てくる。

響子「正治！（駆け寄ってくる）」

正治「（立ち止まって）……母さん」

響子が正治の前で立ち止まる。

正治「僕……、帰らないよ」

響子「見に来て」

正治「え？」

響子が正治に一枚の紙を手渡す。

それは、神田原遊園地の入場券。

正治「これって、遊園地の入場券？」

響子「私のショーを見て欲しいの」

正治「……でも」

響子「（真っ直ぐ正治の目を見て）絶対に来て」

響子が走り去っていく。

正治「（入場券を見て）……」

○ 神田原遊園地・舞台裏

怪人姿の響子が、動きを入念にチェックしている。

香田「いいか？ 戦闘は基本、アドリブって

ことになってる。いつも通り、自由に動き
回っていい」

響子「……（うなづく）」

香田「だが、最後だけは、絶対に負けるんだぞ。合図は、相手が「とどめだ！」と叫んで、飛び蹴りをするから、それをくらって倒れて終わりだ。いいな」

響子「……」

山城「大丈夫、リラックスしてください」

舞台の方では、ワツと歓声があがる。

客の声「すげー、本物のガオレインだ」

子供客の声「がんばれー、ガオレイン！」

香田「始まったみたいだな」

山城「頑張ってくださいね」

響子「（つぶやくように）……負けるもんか」

○ 同・舞台

舞台では、ガオレインと、五人ほどの雑魚敵が戦いを繰り広げている。

ガオレインは、軽やかにバク宙をして、

観客を魅了する。

雑魚敵が全員倒れると、舞台の裏側から、
怪人の響子が出てくる。

香田の声「おのれ！ ガオレイン。今度は俺
様が相手だ」

怪人の姿を見て、観客も歓声を上げる。

客「待ってたぞ、怪人！」

子供「怪人さんも、頑張ってる」

ガオレインと響子が対峙する。

ガオレイン「……」

響子「……」

先に動いたのは、ガオレイン。

響子に向かってハイキック。

バックスウエーで避ける響子。

反撃に、響子も蹴りを放つ。

ガオレインは、連続バク転でかわす。

その攻防を見て、観客は一瞬言葉を失う。
が、一気に拍手が沸きあがる。

○ 同・入り口

正治が遊園地の入り口で立っている。
その手には、入場券を持っている。

正治「……」

○ 同・舞台

盛り上がっている観客達。

すると、ガオレインが響子を指さす。

ガオレイン「とどめだ！」

ガオレインが響子に向かって飛び蹴りを
放つ。

当る瞬間、響子はブリッジをして、その
蹴りをかわす。

ガオレイン「……！」

○ 同・舞台裏

香田「なんで、それをかわすんだ！ 打

ち合わせと違うじゃないか！」

山城「……加納さん」

○ 同・舞台

着地したガオレインに、尻尾を振り回す響子。

だが、転がって避けるガオレイン。

ガオレイン「……（響子をジッと見て）」

響子「行くわよ」

ガオレインに向って走る響子。

響子は、蹴りやパンチを繰り出すが、怪人の手足が短いため、うまく攻められない。

そんな響子に、ガオレインは強烈なミドルキックを放つ。

吹っ飛ぶ響子。

○ 同・入り口

遊園地内から、大きな歓声が聞こえてくる。

正治「……母さん！」

遊園地内に入っていく正治。

○ 同・舞台

サンドバック状態の響子。

ガオレインに打たれ放題。

着ぐるみがボロボロになっている。

そして、ついにガオレインのハイキック
が、響子の頭部にモロに当る。

響子「きゃあっ」

倒れる響子。

○ 同・舞台裏

香田「もういい。そのまま寝てる。あとは、
俺がなんとかする」

香田がマイクに向って、台詞を言おうと
する。が、それを山城が止める。

香田「お、おい！」

山城「……（響子をジッと見て）」

○ 同・舞台

倒れている響子。

何とか立ち上がろうとするが、腕が震え
てうまく力が入らない。

その時――

正治の声「お母さん！」

正治の声が響く。

響子「！（顔を上げる）」

観客の後ろの方に、正治の姿。

響子「……正治」

響子がスクッと立ち上がる。

その響子に向かって、ガオレインが走ってくる。

○ 同・舞台裏

山城「いけ！ 加納さん」

○ 同・舞台

怪人の右手のところにボタンがある。それを、押す響子。

すると、怪人の口から炎が吐き出される。

炎がガオレインを襲う。

ガオレイン「！」

ひるんだガオレイン。

その隙に響子がジャンプする。

そして、ガオレインの頭部に飛び蹴りを放つ。

ガオレイン「ぐあああ」

直撃して、すっ飛ぶガオレイン。

倒れた拍子に、ガオレインの頭の部分がとれる。

中に入っていたのは、明だった。

響子「よっしゃああー」

響子が右腕を上げて叫ぶ。

すると、一気に観客達も盛り上がり始めた。

正治も拍手している。

○ 同・舞台休憩室

休憩室には、響子しかいない。

そこに正治が入ってくる。

響子「……正治」

正治「（微笑んで）かっこよかったよ」

響子「そう」

正治「僕もやってみたいな」

響子「（笑って）あんたがやりたいって言うなら、応援するよ」

正治「じゃあ、母さんに特訓してもらわないと」

響子「……でも、いいの？ お母さん、今日のことのでクビになるかも」

正治「そしたら、僕がバイトでも、家事でもして、家計を助けるよ」

響子「うん。そうだね。お願いしようかな」
響子と正治が笑いだす。

そこに、山城が入ってくる。

山城「加納さん。ビックニュースです」

響子・正治「？」

○ 加納家・リビング

テレビがついている。

アナウンサーの声「遊園地で行なわれていたヒーローショーがなんと、映画化されるという話題でもちきりです。さらに、なんと、

この怪人とヒーロー役が親子で……」

サイドボードの上には、写真立てがある。

写真に、加納響子と加納正治が写っている。正治の、小学校入学式に撮った写真。

その隣には、怪人の着ぐるみを着た響子と、ヒーローの着ぐるみを着た正治が仲よく映った写真が飾られている。

おわり